

福島県立会津短大 佐川 澄子

1. 高校生のなみぬいの能力がどの程度であるか知ることは、学生指導上必要なことでありかつ、母指長から割り出された針長率が高校生の場合にどのような効果があるものかどうか確かめる必要があるので実験した。

2. 地域を広くするために、若松地区と喜多方地区の女子高校生徒を各学年100名、計300名になるように選び、測定用紙を用いて母指長を測定した。これを長さによって4分し、その両端の長短に所属する生徒の中から更に各学年4名宛を抽せんし、実験グループとした。実験第1回目は4月中旬、教師の指導のまだ入らないうちに、何等の指導も練習もしないで、所定の用布を用い、長さの異なるもめんぬい針をランダムに使って5分間のなみぬいをした。第2回目は1週間後、針の持ち方、ぬい方を指導し、1時間の練習時間を与えた。その後同条件で5分間のなみぬいを行なった。4種のぬい針は交互に用いることとした。

3. A群（長指）では、なみぬいの長さでは練習前と練習後の相関関係に1%の有意差が認められたが、B群では認められなかった。目数ではA群で4例とも有意差が認められたのにB群では2例が認められた。正確率はA群では4例とも有意差なく、B群は3例が有意差を認められた。要するに母指長67%前後のぬい針より短かい時は速く、目数も多いが、針目は進歩しない。またそれより長い場合は速くはないが針目は正しくぬうことが出来ると結論される。